農村集落における大谷石建物の外形と町並みの構成 栃木県宇都宮市を中心とする大谷石建造物に関する研究(5)

 大谷石
 農村集落
 石蔵

 屋敷
 町並み

正会員 〇 柳 紘司* 同 安森 亮雄** 同 稲川 芽衣*

1. 序 大谷石の産地を擁する栃木県宇都宮市には、大谷石を用いた建物が集中する集落が点在している(図1)。これまで筆者らは既報^{注1)}において、石の産地である徳次郎町西根地区を調査し、大谷石建物の外形と町並みの構成について報告した。本研究では、田園風景が広がる農村集落である上田原地区を対象とする。そこでは大谷石の蔵や納屋などが、古くから農業を営んできた住民の生活に溶け込み現在も日常的に利用されているが、近年では世代交代や老朽化により取り壊されることもある。そこで本研究では、農村集落における大谷石建物の外形と町並みの構成を明らかにすることを目的とする。

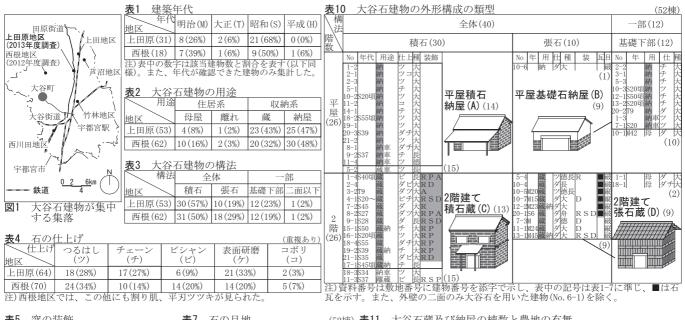
2. 上田原地区及び調査の概要 宇都宮市中心部から北に約10kmに位置する上田原地区は、地区中央に南北に田原街道が通っており、街道沿いに大谷石建物が多く現存し、特徴的な町並みが形成されている。この地区では、大谷石建

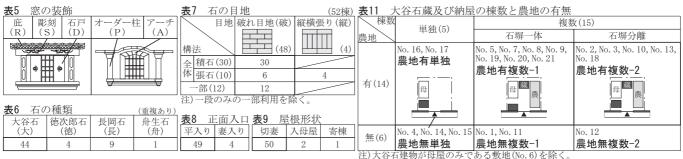
物のある 21 の敷地にある 102 棟の建物のうち、約 5 割の 53 棟が大谷石建物である。これらの大谷石建物の実測、写真による記録及び世帯主へのヒアリングによる調査を行った $^{\pm 2}$ 。

3. 大谷石建物の外形構成

3.1 大谷石建物の年代、用途、構法等の特徴

大谷石建物の外形構成について建築年代、用途、構法、石の仕上げ等から検討した。その結果を西根地区の既往の調査^{注1)} と比較して説明する。大谷石建物の建築年代は、比較的新しい昭和期に建てられたものが多い(表 1)。用途は、蔵や納屋^{注3)} 等の収納系が多く、西根地区と比較すると農村集落である上田原地区の傾向が表れている(表 2)。また構法は積石が多く(表 3)、石の仕上げは西根地区と比較するとチェーンの割合が大きかった(表 4)。このことには、歴史的に構法が江戸・明治初期の張石から徐々に積石に変わり、仕上げは昭和30年以降に採掘方法が機械式に変わり、





チェーンが増加したことを考慮すると、昭和期の建物が多 い上田原地区の傾向が表れていると考えられる。窓の装飾 は、2階建ての蔵を中心に見られた(表5)。石の種類は大 谷石が多いが、付近の地区で採掘されるやや褐色の長岡石 も見られ(表6)、また、石の目地は破れ目地(表7)、正面 入口は平入り(表 8)、屋根形状は切妻(表 9)が大半を占めた。 3.2 大谷石建物の構成類型 大谷石建物を階数と構法 で整理し、用途や装飾も合わせて検討し、4つの外形構成 の類型を導いた(表 10)。平屋では、納屋として使われるも のが大半であり、積石の納屋(A)と基礎のみ大谷石を用い た納屋(B)が該当した。前者は正面入口に大きな庇が付き、 庇下を車庫や物置として利用しているものが多く見られた。 2 階建てでは、蔵として使われるものが大半である。そのう ち積石蔵(C)は、昭和期に建てられたものが多く、2階の窓 に装飾が施されていたり、石の仕上げを1・2階や内外で切 り替えていたりと意匠的に工夫されたものが多く見られた。 張石蔵(D)は、明治期に建てられたものが多く、張石特有 の縦横張りや石瓦が見られた。

4. 農村集落における大谷石建物のある敷地の構成

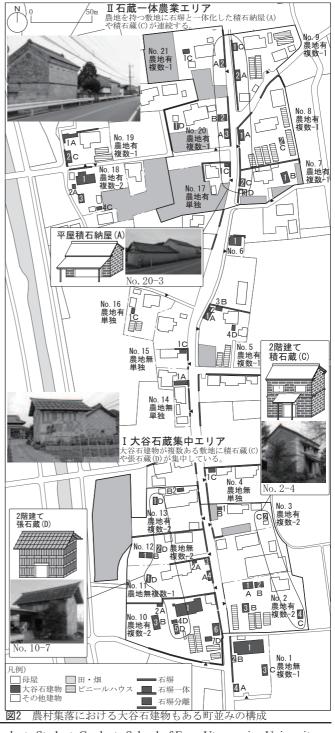
農村集落における大谷石建物のある敷地の構成について 大谷石建物の棟数、大谷石建物と石塀の一体化、また、敷 地内の農地の有無を検討した(表 11)。農地が有る敷地では、 大谷石建物が複数ある場合が大半で、積石の大谷石蔵や納 屋と石塀と一体化した敷地(農地有複数 -1)と一体化して いない敷地(農地有複数 -2)が見られた。これら敷地では、 敷地後方に石蔵が配置されているのが多く見られた。農地 が無い敷地では、大谷石建物が一棟しかない敷地(農地無 単独)が多く見られ、これらは敷地前方に配置されている 特徴がある。

5. 農村集落における大谷石建物のある町並みの構成

ここまで検討した大谷石建物と敷地の構成を地図上に 布置し、農村集落における大谷石建物の町並みの構成 を検討した結果、特徴的な2つのエリアを見出した(図 2)。大谷石蔵集中エリア(I,No.2,3,10,11,12,13)は、 田原街道の南部で古くから建物があるエリアで、大谷石 建物が複数ある敷地の後方に、大正期の積石蔵(C)と明 治期の張石蔵(D)が集中している。石塀一体農業エリア (II,No.7,8,9,17,20,21)は、田原街道の北部で比較的新し い昭和期の大谷石建物が多いエリアで、農地が有る敷地が 集中し、街道沿いに石塀と一体化した積石の納屋(A)と蔵 (C)が連続する景観をつくっている。

6. 結 本研究では、まず大谷石建物の外形を検討し、 平屋では納屋として使われる建物 (A,B)、また2階建てでは 蔵として使われ開口部に装飾のある積石蔵 (C) や石瓦を持 つ傾向のある張石蔵 (D) といった、階数、構法、用途に応 じた外形構成の類型を明らかにした。また、地区全体として、 明治期の張石蔵 (D) や大正期の積石蔵 (C) が集中する大谷 石蔵集中エリア (I)、農地を持つ敷地に石塀と一体化し

- た積石の納屋 (A) と蔵 (C) が連続する石塀一体農業エリア (II) といった農村集落における特徴的な町並みを明らかに
- 注 1) 稲川芽衣、安森亮雄、佐原謙介:徳次郎町西根地区における大谷石建物の外形と町並みの構成-栃木県宇都宮市を中心とする大谷石建造物に関する研究(4)-、日本建築学会大会学術講演梗概集(F-2)、p. 149-150、2013
- 注2) 本調査は、NP0法人大谷石研究会(宇都宮市景観整備機構指定)と宇都宮大 学安森研究室の共同による大谷石蔵集落調査の一環として実施した。
- 注3) 本研究では、「蔵」を正面入口の幅が狭く(1間程度)、普段は戸が閉められ 家財道具などが保管されている建物、「納屋」を正面入口の幅が広く(2間 以上)、普段は開放され、物置や作業場として利用されている建物としてい る。



- * 宇都宮大学大学院工学研究科 大学院生
- ** 宇都宮大学大学院工学研究科 准教授 博士(工学)
- * Graduate Student, Graduate School of Eng., Utsunomiya University
- ** Assoc. Prof., Dr.Eng., Graduate School of Eng., Utsunomiya University